

令和7年度 第1回学校運営協議会 議事録

日時：令和7年6月25日（水）10：00～12：00 （於 会議室）

委員：3名欠席。

参加委員6人中3人（過半数）で、本日成立。

1. 現状報告

●令和6年度 進路状況（進路指導主事）

現在、大学の入試制度が多様化し、学力を問われないタイプの試験が増えている。オープンキャンパスや授業体験、教授との面談で合否が決まる『総合型選抜』という入試もある。毎年、夏休みに『アフターケア』を実施しており、卒業学年の元担任から本人に電話を入れ、様子を見に行く予定。

新年度に入り、仕事をして1ヶ月という時期は、学校とのギャップにも気づく頃。頑張ろうと思える気持ちを育ててあげられなかったのではないかとというのが反省点であり、今後に活かしていきたい。

事業所への通所に加え、一人暮らしのスタートなど、生活スタイルが大きく変わることも、大きく影響があると思われる。通い始めてから数日で、初めての大きな環境の変化に対応できず、辞めてしまった。

反対に、在学中に登校が難しかった生徒が、今、毎日通えているというケースもある。

●『みんなのウェルビーイングを実現する学校』

・4月から、学年チーム担任制度を導入。『窓口が不明確になるのが心配』というご意見もあり、4月は学級担任の体制を発表した。児童生徒のグルーピングや教員体制で、やはり人手が足りない。日々の児童生徒の変化に対応したり、突破したりするために、児童生徒の安心・安全を最優先にホームルーム体制も含めて変更していく。児童生徒にとって一番安心できる環境は教員集団。教員体制を整えることによって、保護者の皆さんの安心にも直結するのではないかと。

・校務の効率化。教員の時間外労働の平均時間は微減。今回、『わく work はた楽 プロジェクト』とウェルビーイングに直結するものを設定。最大の教育環境は『我々がワクワクしながら、楽しみながら働いていこう』というもの。現場の声を実現できるところからみんなで考え、管理職が引き上げて、具体的に変えていくことが大事。小さなアイデアから大きなアイデアまで、プレゼンシートで出して欲しいということで共有した。

2. 協議

（校長）

・児童生徒の『いじめ防止対策』の捉え方としては、最終的には自立活動に返していきたい。それぞれの人間関係の構築やコミュニケーション、その行き違いが事象として出てくる。児童生徒に聞き取りをし、本人の思いを繋いでいくことが大事。それぞれの自立活動の課題として、『友だちと仲良くするには自分には何が必要か？』など、一人一人解決方法を示しながら、教員がその支援者になって児童生徒同士を繋いでいく。

（委員）

・『離職』については、『やり直しがきく』ということが大事。支援学校卒業生の就職率は、障害者雇用や世の中が変わってくる中で高まっているが、高まった分だけ離職率も高まっている。小・中・高の12年間で、『1回失敗したらもうダメ』ということではなく、むしろ『何回も失敗しながら学んでいくこと』が重要。

（校長）

・サポート体制を整え、『周りの人たちは自分を見捨てない』『必ず力になってくれる』という信頼感や安心感が持てるように、学校が安全基地となって、『もう1回リトライ・チャレンジしたい』という気持ちを育てていきたい。外部機関と連携取りながら『こんなサポートしてほしい』という本人からの言葉を聞きながら、2トラ

イを図っていくということを大事にしていきたい。

（委員）

- ・『やり直しがきく』というところを、しっかりケアしていくのが、大事。
- ・卒業生で相談に来るのは、どんな場合か？知った時には、会社に行けなくなっている方が多いか？

（進路主事）

- ・本人が言ってくるケースはなかなかない。企業や事業所から連絡がくるパターンが多い。
- ・本人には『学校に連絡して来ていいよ。』とは伝えている。定期的に顔を合わせる卒業生には、こちらから近況を尋ねるなど、ケアがしやすい。

（委員）

- ・『ウェルビーイング』は学校だけでなく、社会でも必要。
- ・先生が休んだり、変わったりするのは、やはり不安。休む先生は大丈夫か、もしかしたら先生に負担になることを自分が言ってしまったんじゃないか等とってしまう。子どもはいろんな先生と関わっているが、1番好きな先生は、その（休んでいる）先生で、『先生、7月は来るかな』といつも言っている。
- ・先生たちに無理をしてほしくないし、ゆっくり休んでほしい。かといって現場の先生たちは、休む先生がいるとバタバタしているのだと思う。
- ・良い職場にならないと人は増えない。新しい人がどんどん入ってくるわけではないし、辞めたり、戻ってこなかったりすることもある。
- ・働きやすい環境になってほしい。先生たちが働きやすかったら、子供たちも安定して過ごせるんじゃないかと思う。

（委員）

- ・大阪市は今年、新採用のうち60人ほどが欠員補充制度の採用者。府下の支援学校では欠員が出た時の講師が全然見つからず、ずっと欠員状態ということがありますが、市内のこの制度では、必ず配属されるため、休む先生も安心。ただ、採用者側からすると、慣れた頃に違うところに異動ということも多々ある。

（校長）

- ・働き方改革の一つに会議の削減。会議そのものの回数を減らすこと、会議時間を45分と徹底するなど、対策が必要。
- ・電話対応の時間（終業17：00までの受付）が定着してきたように、会議回数や会議時間の検討も進めていきたい。
- ・授業準備にかかる時間については、先生方の流儀やこだわりなど、いろんな思いが入るため、時間を有する業務となっている。

（委員）

- ・一般の中学・高校では時間割の中で、授業のない時間帯に運営委員会やその他の会議を行い、放課後の会議がないところも多い。支援学校は児童生徒と関わる時間が長いため、放課後にしか会議が設定できない。

（委員）

- ・PTAでは、今年度よりサポートメンバーを募集している。これまでは毎年、各学年2名ずつ学年委員として選出し、各種委員会に分かれて仕事をしていたが、残したい行事や必要な業務だけを残し、役員だけで回そうと学年委員自体をなくした。
- ・毎年、『PTAそろそろやらなきゃダメかな。』というドキドキ感や、『やりたくないからPTA嫌だ。』という意見もあり、それが無くなることで、みなさんが気軽に、負担に思わずにPTAに興味を持って参加してほしい。
- ・PTAの仕事は対府懇談会がメインだと思っている。先生たちと話して、子ども達の環境が良くなるのが大事。だから、PTAという集団は必要であり、細々とでも続けていきたい。
- ・横の繋がりがない人にとって、他の人と喋ったり、わからないことを気軽に相談したりできる環境を作って

いく手段を『お茶会』として計画・開催した。

・保護者の負担を軽減しながら、先生と子ども達の環境を見ていきたいし、先生たちを見ていくことも必要。PTA は必要だということを、いろんな人たちに伝えていきたい。

（委員）

・自校の防災としては、PTA の予算で、自動で動くカメラを付けた。お金が発生することは、本当に必要なものか、十分な検討が必須。

（校長）

・本校は自治会の水害の避難所。自治会独自の避難訓練では、教職員不在時でも、自分たちで学校を開けて、入ってきていただくという訓練をしていた。

・障がいを持った子ども達が実際にどう避難していくのかを考えた時に、避難所の指定を受けて地域と連携していくのは必須。

・地域と繋がるという意味では、地元の小学校とも連携の仕方を模索してみたい。

・福祉との連携も必須なので、本校の児童生徒が通うデイサービスや卒業生が通う事業所など、モデル的に繋がる場所を模索したい。

・備蓄品としては非常用持ち出し袋やヘルメット、食料を有してはいるが、おそらく 2～3 日で尽きる。防災士の助言を仰ぎ、PTA と連携しながら、緊急対策費から必要なものを購入していく必要がある。

（委員）

・子ども達の食料と同時に、薬も必要。薬を安全に保管し、1～2 日で無くなった時に医師会と連携を取れるなど、医師会を通じてもらえるという話を聞いたことがある。

（教頭）

・年に 1 回、保護者の方に実際に迎えに来てもらう『引き渡し訓練』をやっているが、本当に起こった時にどう対応するのかというのは、やはり難しい。防災士をアドバイザーとして色々意見をもらいながらやっていきたい。

（委員）

・『地域と行動』というのが今の防災のキーワード。そのためにも学校のことを知っていただける大きなチャンス。

（教頭）

・公民館の館長からは『地域に支援学校があるのはわかってい

るけれども、支援学校の生徒さんと交流する機会がなく、どんな学校なのかはよく分かっていない。』『それを発信する場をぜひとってほしい。』と聞いている。

・最終的には地域で過ごしていく子どもたちにとって、支援の輪を広げていくというのは、私たちの大きな使命である。

次回 12 月 10 日（水）『進捗状況の報告』 予定